

## 谷崎潤一郎『少将滋幹の母』にあらわれる 平安時代のイメージ

THE HEIAN PERIOD  
IN TANIZAKI'S *SHOSHO SHIGEMOTO NO HAHA*

Jacqueline PIGEOT\*

From his early years, Tanizaki Junichiro read widely in the literature of the Heian period and his late work *Shosho Shigemoto no Haha* (“Captain Shigemoto’s Mother”) may be described as the fruition of his lifelong interest in the classics. This novel includes quotations and transcriptions in modern Japanese from numerous classical works, creating a work largely in the Heian style. It is nevertheless an extremely “Tanizakian” novel. In my presentation, I will attempt to reveal the process whereby the author effectively utilizes the Heian period materials.

By a detailed comparison of various passages from the novel with their original sources (mainly from *Konjaku Monogatari*) and reference to other works by Tanizaki, I hope to elucidate the author’s use of his materials regarding names, psychological descriptions of characters and the relationships between them, and to illustrate Tanizaki’s process of assimilation.

---

\* ジャックリース・ピジョー パリ第7大学教授。『道行文の研究』で第七回山片桃蟠賞を受賞。主な論文・著作に「中世物語の一典型について」（岩波書店『文学』1976年9月）、「『吉野葛』における材源への言及の役割」（谷崎潤一郎国際シンポジウム、1995年4月）、「京の人・田舎の人、室町時代物語の場合」（岩波書店『文学』1988年2月）、『奈良絵本集・パリ本』共著（『古典文庫』第582冊）など。

今日のお話のテーマは「谷崎潤一郎『少将滋幹の母』にあらわれる平安時代のイメージ」でございます。

『少将滋幹の母』という小説は、谷崎の晩年の作品ですが、周知の通り、彼は若い時から平安時代に興味を持っており、二十四才で書いた『誕生』という劇曲は、一条天皇の時代を舞台にしておりました。ほかにもその時代を扱っている作品がありますが、言うまでもなく谷崎の平安時代への興味を最もはっきりと示すものは『源氏物語』の口語訳であるに違いありません。『少将滋幹の母』を書く時には、谷崎はすでにほぼ十年前に最初の翻訳の刊行をすまして、「新訳」に取り組んでいたのです。

このように長年平安時代になじんでいた谷崎の徹底的な研究の結果の一つが『少将滋幹の母』であると思われます。この小説に関する、玉井幸助氏の論文を引用させていただきます<sup>①</sup>。

「少将滋幹の母」の中には、到るところに考証穿鑿があり、その為に引かれた書物は、平中日記・伊勢物語・大和物語・源氏物語・河海抄・弄花抄・大鏡・尊卑分脈・古今集・後撰集・拾遺集・後六々撰・敦忠集・大智度論・摩訶止観・閑居の友・往生伝・発心集・十訓抄・宇治拾遺物語・今昔物語・世継物語の多きにわたり、それが何れも正確に引用せられているので、この小説が事実をありのままに伝えようとする努力を払っていることの強い証拠となっている。

ここに列挙された資料の中には、鎌倉時代のものも入っていますが、とにかく『少将滋幹の母』はある意味では、——少なくともその最初の三分の二は——平安古典の引用文のモザイクという感じがするわけでございます。

しかし谷崎のようなすぐれた作家は、いくら引用が多くても、それらの使用は彼固有の意図を助けるためであると思われます。つまり、彼の作り出した小説にあらわれる平安時代は、自分のフィルターでこした平安時代であるはずだと思われます。これから私が試みるのは、谷崎固有の平安時代を捉えるということ、具体的に申しますと、彼の資料の使い方を検討するということです。

ただし、『少将滋幹の母』のような、内容が豊かで、しかも複雑な作品の場合は、限られた例にとどめるより仕方ありませんので、その点あらかじめお断りいたします。

まず、この小説の題名から始めたいと思います。というのは、『少将滋幹の母』というタイトルは、非常に明瞭で、そこには何の問題もないようですが、少しつっ込んで考えてみると、この表現自体にも谷崎の、平安時代の材料の使い方が多少うかがえると思うからです。

確かに、小説の題として、作中人物の名前を取るのは、不思議ではありませんし、その人物を間接的な言い回しによって指すことも外に多く例がみられます。『滝口入道』『高野聖』『武蔵野夫人』などがこれです。特に『少将滋幹の母』のような小説、つまり平安時代の女性を主人公にした小説なら、遠回しな表現を使うのは、むしろ当然でしょう。周知のように、その時代には、女性の本名は使われず、間接的な呼び名がいろいろ使用されていたのですが、その一つ、「だれだれの母」といった表現はごく常套的でした。『かげろう日記』の作者は、藤原道綱の母として知られておりますし、『成尋阿闍梨母の集』の作者も、その息子の名前で呼ばれています。

こういう理由から、谷崎の、この小説の題名は非常に平安らしく響きます。「少将」という官位まで入れたことも当時の資料をそのまま写したかのように思われます。

つまり、歴史上の人物でありながらその本名がわからない女主人公を少将滋幹の母と呼ぶのは、谷崎の、平安時代の出典に対する忠実さという印象を与えております。が、実際は、どうでしょうか。

谷崎が材料として使った古典（『大和物語』や『今昔物語』や『世継物語』や『十訓抄』や『拾遺集』など）を調べてみますと、彼女が「滋幹の母」と呼ばれている文献は見当たりません。彼女の呼び名はいくつかあり、その中には「在原棟梁の女」、又は「本院の北の方」というのが普通です。確かに、もう一

つやはり息子の名前が入っている呼び名もあります。ただしその息子は滋幹ではなく、彼の弟敦忠です。

なぜかと申しますと、それは滋幹より敦忠の方が官位が上で（中納言になった）、しかもはるかに有名だったからです。

小説の中で谷崎自身が説明するように、敦忠は歌の道でも（『敦忠集』が残っています）、管絃の道でもすぐれており、宮廷で非常に尊敬されていたのです。『大鏡』でも、敦忠は藤原時平の息子として詳しく扱われています。それにもかかわらず、谷崎が自分の小説の主人公（より正確に言えば、主人公の一人）にしたのは、敦忠ではなく、資料にはあまり出てこない滋幹です。なぜでしょう。谷崎自身が鍵を与えてくれています。資料があまりないからこそ、滋幹が小説の主人公になる資格をもっていた、ということ。つまり、滋幹の、歴史上のイメージに空白があるからこそ、作者が自分の幻想を投影するのに適当だったのです。谷崎がそれをはっきりと話したことがあります。『少将滋幹の母作者の言葉』でこういうふうに言っております<sup>②</sup>。

要するに私は、なるだけ史實の尊厳を冒さないやうにしながら、記録の不備な隙間を求めて自分の世界を繰りひろげようと思ふのである。

さて、小説の題名に戻ってみますと、この女主人公の呼び方には、谷崎の巧みさが示されていると思われます。というのは、谷崎は、かつてに呼び名を創作したのですが、それをまず平安風にした一方、呼び名にこの時代の普通の呼び方とは多少違う意味を与えて、彼独特の世界を表わそうとしているからです。つまり、古典にでてくる道綱の母とか成尋阿闍梨の母とか敦忠の母というような呼び名は、道綱や成尋や敦忠といった偉い、有名な人を生んだ女という意味ですが、谷崎が示唆しているのは、そのような親子関係ではなく、「滋幹の母」はむしろ滋幹が一生なつかしく慕った女を意味するのです。つまり、全く感情的な親子関係を表わしているのです。

というわけで、この題名を作った谷崎は、史実に背いていませんが、何げなく原典を曲げて、そこには現われていない事（滋幹とその母との関係）に光を

投じて、本当らしく響く表現によって彼独特の幻想（離れている母への愛着）を前面に押し立てているのです。

平安時代らしい女主人公の呼び名が実際には出典にみあたらないと同様に、本物の資料として小説の第8章にでてくる「適古閣文庫所蔵の写本の滋幹の日記」も、周知の通り、谷崎の全くの創作です。これも、彼の見事なごまかしです。というのは、平安時代の公家が日記をつけているのはごく普通である、しかもそれらの日記の写本が部分的に散佚した場合もあるので、谷崎の、次の指摘は非常にあり得べきことのようにです<sup>③</sup>。

適古閣<sup>しうこかく</sup>文庫所蔵の寫本の滋幹の日記がある。これは殘缺で、適古閣本以外にも寫本が二三あるやうだけれども、何處にも完本は傳はつてをらず、大體に於いて天慶五年の春頃から以後七八年の間に互つて、折々書き繼がれたらしく思はれるものが、部分的に残つてゐるだけである。

多くの読者が真に受けたのは不思議ではありません。ところが、次の文はいかがでしょうか。

が、その内容は、殆ど全部が母を戀ひ慕ふ文字で埋まつてゐるのである。

確かに、平安時代の女性の日記には、私的なものが多くあります。先程触れた『成尋阿闍梨母集』は、母性愛の記として挙げられます。

しかし、公家の場合は、谷崎の言う「殆ど全部が母を恋ひ慕う文字で埋まっている」日記はありうるのでしょうか。私はそういう気はいたしません。というのは、土田直鎮氏の言葉を借りれば「今日に伝わる平安時代の諸日記はあくまでも公事、朝儀優先で、後年の公事奉行の際に役立つことを目的としている」からです<sup>④</sup>。

つまりここでも谷崎は歴史（文芸史）の事実を曲げて、自分自身の感受性を平安朝の人に投影したようです。歴史上の少将滋幹を、自分と同じように『母を恋ふる記』というものを書いた人に変形したといえましょう。

さて、滋幹の母に関わる一番有名なエピソードは、年取った国経の若い妻であった彼女が時平に「取られた」という話です。周知の通り、「取られた」というのは、国経の催している酒宴の終わりに、酔っぱらった時平が引出物として彼の北の方を頼みましたら、同じく酔っぱらっている国経が差し上げた、という次第です。

それを詳しく語る『今昔物語』に基づいて、谷崎は『少将滋幹の母』の第3、第4章でさらに詳しく語っているのですが、原典と谷崎の小説のその個所を比べるのはおもしろい。相違点を一々挙げるわけにはいきませんので、例の饗宴描写にしぼって一二取り挙げたいと思います。

まず、『今昔』の原文を読んでみましょう<sup>⑤</sup>。いうまでもなく「左の大臣」は時平のこと、「大納言」は国経のことです。

むつき みか おとしかるべ かむだちめ てんじようびと  
正月ノ三日ニ成テ、大臣可然キ上達部殿 人少々引具シテ、大納言家ニ  
おほ  
御シヌ。大納言物ニ当テ喜ビ給フ事無限シ。 おほむあるじ げ  
ことわり  
理ト見ユ。

さるのとき おほむつき うたうた  
申 時打下ル程ニ渡給ヘレバ、御坏ナド度々参ル程ニ、日モ暮ヌ。歌詠  
ヒ遊ビ給フニ、謎め微妙シ。其ノ中ニモ左ノ大臣ノ御形ヨリ始メ歌詠ヒ給  
ヘル有様、世ニ不似ズ微妙ケレバ、万ノ人目ヲ付テ讚メ奉ルニ、此ノ大納  
言ノ北の方ハ、大臣ノ居給ヘルそば簾すだれヨリ近クテ見ルニ、大臣ノ御形チ、  
音、気ハヒ、たきもの 薫ノ香ヨリ始テ、世ニ不似ズ微妙キヲ見ルニ、我ガ身ノ宿  
せ こころう  
世心疎ク思ユ。「何ナル人此ル人ニ副テ有ラム。我レハ年老テ旧ふる髯キ人ニ  
副タルガ事ニ触むつかしテ六借ク思ユルニ、弥いよいよ此ノ大臣ヲ見奉ルニ、心置所無ク  
侘シク思ユ。大臣詠ヒ遊ビ給テモ、常ニ此ノ簾ノ方ヲ尻目ニ見遣リ給フ眼  
見ナドノ恥カシ気ナル事云ハム方無シ。簾ノ内サヘ破無シ。大臣ノ頬ほほ咲テ  
見遣セ給フモ、「何ニ思給フニカ有ラム」ト恥カシ。

さて、人物、特に女主人公の態度はここではどのように描かれているのでしょうか。大臣-時平-は北の方にとって魅力の化身であり、自分の夫に比較して嘆く一方、時平のふるまいに気がついて恥しくなるといふふうにとめられま

す。谷崎は、時平に関しては、描写を長くするものの、原典には忠実であるのに対し、北の方の方は多少曲げています。まず、原典を書きなおす際、谷崎には一般的に、表現をはっきりとして、人物の態度をくっきり浮かびあがらせるという手法がみられます。具体的に言いますと、『今昔』ではただ「簾より近くて見る」と書いてある所を、谷崎は「吸ひ寄せられるやうに御簾の方へ体を擦りつけてゐた」と書きなおすわけです。この表現のおかげで、『今昔物語』、そして一般的に言うと平安朝の文学では、ほかすという傾向が強い、女性、特に貴族の女性の性欲を、谷崎は露骨に表わしてしまうと言えましょう。

北の方が時平に引かれている、ということ強調していると同じく、谷崎は彼女の、その夫大納言国経に対する感情も強調しています。『今昔物語』では、彼女は「年老いてふるくさき人」の妻になった自分の運命を「侘しく」思っています。谷崎ではむしろ、国経のみつともない態度に呆れて、侘しさというより、冷淡さとか嫌悪感をいだいているように描かれています<sup>⑥</sup>。

北の方が先づ驚いたのは、主人の國経が常になく醉態をさらけ出し、だらしない恰好で何かろれつ呂律の廻らないだみごゑ濁聲を擧げてゐることであつたが、左大臣もそれに劣らず酔つてゐるらしい。だが此の方はさすがに夫の大納言のやうな見つともない態さまはしてゐない。大納言は坐つてゐても彼方へよろ—此方へよろ—し、眼がどろんとして何を見てゐるのやら分らないが、左大臣は居ずまひも正しく、しやんとしてゐて、酔つても威容を崩さない。

さて、谷崎の古典の書きなおし方を調べてみますともっとおもしろい、しかも谷崎らしい原典の利用がみられます。それは、例の酒宴の場面において、平仲という人物に関するところです。時平を描写してから、谷崎はこう書いています。「左大臣の席からはずっと離れた遙かな末座に、別にもう一人、矢張此の御簾のあたりへ密かな視線を注いでゐる男があるのを、北の方は疾とうから意識してゐたが、それは云ふ迄もなく平仲であつた。」<sup>⑦</sup>

周知の通り、平仲（すなわち平貞文）は、色好みとして、そして「大臣の御

許に常に参」る（今昔）、時平の側近として知られております。谷崎は、小説の冒頭に彼を登場させて、いろいろな資料に基づいて、彼に関するいくつかのエピソードを詳しく話しています。

今問題にしてみたいのは、平仲がこの酒宴に出席したということです。『今昔物語』を読みますと、時平が「しかるべき上達部・殿上人少々引具して大納言の家におはしぬ」ということなので、平仲もその際一緒に出席したということとはありえないわけではありませんが、出たとは書いてありません。だからといって、平仲が出席したことが谷崎の全くの想像の産物であるわけではありません。というのは、もう一つの資料にはそれがほのめかされているからです。その資料は、『今昔物語』と関係がありながら、『今昔』ほど広く読まれていない説話集です。それは『世継物語』と呼ばれています（谷崎はそう記していますが、『天明六年板宇治大納言物語』としても知られております）。

・とにかく、そこには、酒宴の場面は『今昔』と全く同じように（つまり平仲の出席に触れずに）描いてありますが終わりに、時平が国経の妻を連れて帰ろうとする折に、こう書いてあります。

おとど北の方車に乗せ給ひしほどに、下襲の尻とりて、御車に入るるやうにて、平中寄りて書きつけて、押しつけて去りにけり。おとどは見給はずなりにけり。北の方また見けるに、袖の下に、みちのくに紙をひき破りて、押しつけたるを、あやしと思ひて見れば、しのぶる人の手にて、

物をこそいはねの松の岩躑躅いはねばこそあれ恋しきものを  
となむありける。車に乗りしほど、下襲の尻入れしは、これにこそありけれとおほしける。

この所に至って初めて平仲も出席していたことがわかってくるのですが、谷崎は、この唯一の短かい文章に飛びついて、酒宴に出た平仲のことを長々と話しています。どうしてでしょうか。それは間違いなく、平仲が一時、北の方（滋幹の母）の恋人だったからでしょう。（これもいくつかの古典にでていることで、『大和物語』や『後撰集』などにもみられますが、『今昔物語』の、酒宴

の場面の少し前にそれがほのめかしてあるのです。) とにかく、北の方が簾のなかから見ているのは、時平だけではなく、平仲でもあります<sup>⑧</sup>。

左大臣の席からはずつと離れた遙かな末座に、別にもう一人、矢張此の御簾のあたりへ密かな視線を注いでゐる男があるのを、北の方は疾うから意識してゐたが、それは云ふ迄もなく平中であつた。女房たちは勿論それに気が付いてゐたのであるが、今の場合北の方に<sup>はぶ</sup>憚かつて、此の優男の噂をするのを差控へながら、心の中では左大臣と比較して、孰方がより美男子であるかを批判してゐたでもあらう。北の方は、嘗て幾夜となくうす暗い<sup>ともしび</sup> 閨の燈火のはためく蔭に、夫の大納言の眼をかすめて此の男の抱擁に身をゆだねたおぼえはあるが、かう云ふ晴れの席上で、歴々の人々の間に伍してゐる彼を見るのは始めてゝあつた。が、さしもの平中もかう云ふ座敷では、堂々たる時平の貫祿に押されて、別人のやうに貧弱に見え、蘭燈なまめかしき帳<sup>とぼり</sup>の奥で逢ふ時のやうな魅力がない。

ここで表われる滋幹の母は『今昔』や『世継物語』で描かれたやうな、あわれな妻ではなく、昔の恋人の弱点を発見して、冷淡に判断する女です。三人の、自分にほれてゐる男が集まっていますが、彼女は夫を完全に無視している一方、二人の色好みをよく観察し、彼らを冷静に評価したり、比べたりしている、浮気な女として描かれてゐるのです。この場合でも、谷崎は原典を歪めてはいませんが、古典では少し影の薄かった滋幹の母を、はっきりと好色な女にしてしまいました。

谷崎がこの場面で平仲の出席を強調した理由はそれでわかります。谷崎は、『今昔』を読んで、ある男がその夫の前で女を誘惑しようとしている場面をおもしろいと思つたに違いありませんが、もし、『世継物語』がほのめかすやうに、彼女の昔の恋人が居合わせれば、なおさらおもしろい、と思つたのではないのでしょうか。

なお、この出典の使い方を谷崎らしいと、先程申しましたのは、彼の他の作品にも同じやうな場面が見られるからです。すなわち、ある女の人が、主人と、

昔の恋人と、今引かれている男の中に囲まれて、しかもそのような困難な状況でも冷静さを保つ、というパターンは、二十五年前に谷崎がすでに作り上げていたのです。

それは『痴人の愛』です。平安朝の優雅な貴族である滋幹の母と、モガの模範で、伊藤整氏の定義を借りれば「大正末年から昭和初年にかけての典型的な新しい女性」<sup>⑨</sup>であるナオミを比べるのはおかしいと思われるかもしれませんが、ある程度、彼女らと、それぞれのまわりにいる男たちとの関係構造は似ていると私は思います。

まず、この二人の女性には、いずれも年とった主人があります。滋幹の母の場合は、国経は五十才も年が上です。『痴人の愛』の場合は、差は十二才だけですが、語り手である主人（河合譲治）はしきりにその年の差を口にし非常に強調しているので、パターンとしては同じと言っても差し支えないと思います。そして、いずれの場合も、夫と妻の関係は親子関係に似た所もあり、『少将滋幹の母』では「大納言にすれば、年の若い北の方を娘のやうに思ふ」<sup>⑩</sup>と書いてありますし、『痴人の愛』では、譲治はナオミを「ベジちゃん」と呼んで、ナオミは彼を「パパちゃん」と呼ぶわけです。なお、どちらの主人もその女を崇拝していますが、彼女らはその愛にあまり感動せず、むしろ若い、派手な男に引かれています（片方は時平、片方は熊谷—ナオミがマーちゃんと呼んでいる人）。

ところが、注意していただきたいのは、どちらの場合も第三番目の男がいるということです。その第三番目の人は、いずれの小説でも、現在女が引かれている男の友人です。『少将滋幹の母』では、平仲はよく時平の会話の相手になると言われていますが、『痴人の愛』では浜田は熊谷の遊び友だちです。そして、平仲も浜田も最近までそれぞれの女と肉体関係を持っていながら、第二番目の男たちによって押しのけられようとしております。

なお、不思議なことに、両方の場合、愛に破れた彼らは各々の女の夫と妙な好感感情で結ばれています。平仲は、国経に同情を寄せています（それは言う

までもなく出典に書いてない)。浜田はナオミを取り戻そうとしている譲治を手伝ってあげます。ところが、二つの小説の間には、もっとおもしろい共通点があります。それは、これらの人物の関係構造が同じような具体的な場面に結晶するということです。すなわち、三人の男が、女のまわりに集まっている場面。『痴人の愛』では、そのような場面は三回もでてきます。第10章では、カフェ・エルドラドという銀座のダンスホールで皆一緒に遊んでいる場面。第12章では、四人とも一緒に同じ蚊帳で寝ている場面。そして第15章では、四人と、熊谷の二人の仲間が集まって、ナオミの主人の家で、しかも彼に誘われて、楽しく夕食している場面。

「ではどうです、僕等と一緒に晩飯をたべませんか。折角来たもんだから、——」

ナオミも浜田も熊谷も、一としきり黙り込んでしまったので、私はどうもそう云わなければ、バツが悪いような気がしました。

その晩は久しぶりで賑やかな晩飯をたべました。浜田に熊谷、あとから関や中村も加わって、離れ座敷の八畳の間に六人の主客がチャブ台を囲み、十時頃までしゃべっていました。私も始めは、この連中に今度の宿を荒らされるのは厭でしたが、こうしてたまに会って見れば、彼等の元気な、サッパリとしたこだわりのない、青年らしい肌合が、愉快でないことはありませんでした。

これらのくんだり（特に最後の）をみますと、なぜ谷崎が『少将滋幹の母』の酒宴の場面に、出典では単なるほのめかしに過ぎなかったにもかかわらず、平仲の出席をこのように誇張したかがわかります。このように資料を書きなおしたのは、無意識にせよ、この場面を、自分の幻想世界に、つまり前から彼の中に潜んでいたモデルに一致させるためだったと私は考えずにはいられません。この微妙な歪曲のおかげで、この場面に表われる平安時代のイメージと、谷崎独特の世界のイメージがぴったり重なってきて、切り離せなくなると言わなけ

ればなりません。

さて、国経の饗宴の場面に戻ると、平仲の役割ということのを別とすれば、話の内容に関しては、谷崎は『今昔』や『世継物語』からは離れてはいません。しかし、当然、説話の作者が早いテンポで語っている話を、彼はゆっくり詳細に語っております。原典の、一つの言葉を出発点として、それを展開して、その内容を具体的に表わす、という手法はよく見られます。その目立った例として、次の箇所があります「歌うたひ遊び給ふに、おもしろくめでたし。」という『今昔』の短い文章をとらえて、谷崎は酒宴の描写に歌謡をいくつかとり入れています。国経には『白氏文集』からとった漢詩を、時平とその仲間には催馬楽を歌わせます。

ここで、その、谷崎の書き方について少し考えたいと思います。つまり、引用する謡は、どういう機能を果しているのでしょうか。

まず、それらの謡は、それぞれの人物の、その場の気持ちをうまく表わしているといえます。

国経の方は、老人になった自分は、恋愛をあきらめなければならないということ。

…………洛陽の兒女面は花に似たり、河南の<sup>たいいん</sup>大尹頭は雪の如し。…………

または

玲瓏<sup>れいろう</sup>々々老いたるを奈何<sup>いか</sup>にせん

それに対して、時平は、女に言い寄ろうとする若者の熱情をうたっています。

「我が駒」を謠ひ出して、

まつち やま  
待乳山

待つらん人を

行きてはや

あはれ

行きてはや見ん

それだけではありません。その外に、時平とその仲間たちは女の気持ちを伝える催馬楽も謡っています。「東屋」や「我家」などという催馬楽です。

「押開いて來ませ、我や人妻、……………」

「鮑さだをか石陰子よけん、……………」

「りららりるろ、……………」

「我が門を

とさんかうさん練る男

よしこさるらしや

よしこさるらしや」

これらの催馬楽を謡うのは、相手の女（この場合は滋幹の母）も自分と同じ気持ちがあって、きっとなびいてくれるだろう、という期待を表わしているに違いありません。

なお、国経は漢詩、時平は催馬楽、という区別が目につきますが、その意味が私にはよくわかりません。おそらく、漢詩は、催馬楽に比べて、何となく込み入った、日常生活から離れた、なじみにくい詩歌として、国経の、色情をあきらめた、孤独な心理状態を暗示することができる、と谷崎が考えたと思われるます。

それに対して、催馬楽の方は、飾りなしに、単純な肉欲を表わす歌として、色好みの時平にふさわしい、と谷崎が思ったのかもしれませんが。そうなら、それらの謡の内容を別にしても、それぞれのジャンル自体が自ずと、それぞれの人物の動く世界、生まれ付き、態度を適当に表わすことになり、そこにもやはり、谷崎の巧みさがみられると思います。

しかし、人物の気持ちの問題、言い替えれば、人物の心理描写の問題だけではありません。このエピソードの構造から見ると、それらの謡のおかげで、読者はその大詰めに察することができます。実際に、もうじきに、老人は美人に捨てられ、若い人たちは結ばれるということ。その意味で、谷崎がこれらの謡

を入れたのは、伏線を設定するためだったと考えられないでしょうか。

ところで、谷崎の酒宴の描写に出てくる謡についてもう少し違う観点から考えてみたいと思います（話が多少くどくなるかもしれませんが）。

散文に韻文がはさんであるという形式は、平安時代独特のジャンルである歌物語を思わせます。その点でも、谷崎の小説に平安時代の世界が表われているとは否定できないでしょう。しかしそれだけではありません。

周知の通り、谷崎は、平安朝の古典を材料に使っていても、その小説を純粋な口語で書きました。谷崎は、遠い時代のイメージを浮かび上がらせるために、すたれた表現を挿入したりして、読者を異なる環境に導くという方法は避けました。

実際は、珍しい語彙によって読者に異郷感を与えるという手法は、谷崎自身も若い時には使ったことがあります。たとえば「麒麟」という短編です（もしかすると、それはA. フランスという、フランス人の歴史小説の作者の影響だったかもしれませんが）。とにかく『少将滋幹の母』では、完全に異なる趣向を試みたようです。地の文は言うまでもなく、人物の言葉までも、全くの口語です。たとえば、時平と平仲との対話<sup>①</sup>（この対話に当たる場所は、言うまでもなく『今昔』には全くありません）。

それに今宵は誰も彼もが羽目を外して<sup>はづ</sup>燥い<sup>はしや</sup>であるのに、どう云ふわけか平中はひとり沈んで、自分だけは酒が甘くないと云ひたげな様子をしてゐるのであつた。

と、時平がそれに眼をつけて、

「佐殿」

と、遠く隔たつた席から呼んだ。

「あなたは今日は妙に<sup>しよ</sup>萎げてをられるね。何か仔細があるんですか」

時平の顔にいたづら好きな子供がするやうな、意地悪な微笑が浮かんだのを、平中は世にも恨めしさうに横眼で見たが、

「いや、そんなことはございませんが、……………」

と、強ひて苦しうな愛想笑ひを洩らして云つた。

「でも可笑しいですね、酒がちつとも行かんやうぢやないですか、もつと飲み給へ〜」

「十分戴いてゐるのでございます」

「そんなら一つ、得意のわいだん猥談でも聽かせ給へ」

「御、御冗談を仰おつしやつては、……………」

「あつはゝゝゝ、どうですか方々」

と、時平は一座を見廻して、平中を指さしながら、

「此の人はじん わいだん のろけ猥談と惚氣話が頗る得意なのですが、一席こゝでやつて貰はうぢやないですか」

「ようよう！」

このような調子の対話を読むと、作中人物が平安時代の人だか現代の人だかわかりません。言うまでもなく、谷崎はその文体を故意に選んだに違いありません。なぜでしょうか。まず、谷崎のような文章の天才にとっても、平安時代の言葉で会話を作り上げるのは大変むずかしくて、彼はでたらめと非難されないかと思ったのかもしれませんが。

しかし、もう一つ、より重要な理由があったでしょう。この小説に出てくる人物は、いくら遠い過去の人で、しかも資料でしか知り得ない人でも、現代人と同じ心を持っている、私たちのような人間だ、ということを彼は示したかったのでしょうか。そうなら、現代人にとってわかりにくい言葉で彼らにしゃべらせれば、読者と彼らの間には隔たりが生じる恐れがある、と谷崎は考えたと思われれます。

とにかく、『少将滋幹の母』の会話も口語の散文で書く一方、この酒宴の場面だけではなく、いくつかの所に漢詩や歌謡や和歌をちりばめるといふ手法を彼は使いました。そのおかげで、時々、平安時代の人々のなまの声が聞こえてくるような気がします。

不自然な文語風の表現を使って読者をうんざりさせるかわりに、詩歌の魅力

を用いて、平安朝のおもかげを、谷崎は味あわせてくれます。

『少将滋幹の母』はその点、谷崎の文学の中では、例外ではありません。

この小説が出来上がるより二十年ほど前に書いた『盲目物語』でも谷崎はその手法をすでに試みています。戦国時代に設定してある『盲目物語』には、当時の様子はやっていた『閑吟集』の歌謡がところどころに引用してありますが、その引用の役割は、今述べたのと同じだと思います。つまり、昔の各時代の独特なイメージは、人間の心理を調べても必ずしも捕えられるわけではありません。(先程述べたように、どの時代の人と同じ心を持っていると、谷崎が思い込んでいるようですから。)

風俗にも深い意味がないので、適当な解釈の鍵にはならないでしょう。むしろ、ある時代に生まれた、または流行した謡にこそ、当時の人の物の感じ方、美的感覚が籠っていて、場合によって当時の人々の話しぶりまでも伝わっていると、谷崎が思っていたのではないのでしょうか。

事実、彼の小説を読みますと、よく謡・シャンソンがでてくるのに驚きます。(『蓼喰ふ虫』には浪花節、『痴人の愛』にはイタリア語や英語の唄など。)それは無視できない現象だと私は思います。が、今日は、それを指摘するにとどめましょう。

以上、内容の複雑で、豊富な作品である『少将滋幹の母』から一、二点を取り出して、それを考えてみましたが、それだけでも谷崎がどのような手法によって、小説の題名なり、人物の関係構造なり、文体なりからみて、出典を重要な歪曲することなしに、それらを活用したか、ということが少し明らかになったと思います。

谷崎の技巧は、平安時代の世界に自分自身の世界を重ね、ぴったりと切り離せないような、統一したイメージをかもし出すことにあると存じております。

附記：発表時の朗読につきまして、内山巖氏のお世話になりました。感謝申し上げます。

注

- ①玉井幸助「少将滋幹の母」『谷崎潤一郎集Ⅰ』現代日本文学大系30、筑摩書房、昭44、390頁。
- ②『谷崎潤一郎全集』、中央公論社、第23巻、234頁。
- ③『全集』巻16、234頁。
- ④「日記」、『岩波日本古典文学大辞典』。
- ⑤『今昔物語』、巻二十二ノ八。
- ⑥『全集』巻16、191頁。
- ⑦192頁。
- ⑧192～193頁。
- ⑨『谷崎潤一郎の文学』、中央公論社、昭和45年、116頁。
- ⑩『全集』巻16、205頁。
- ⑪193～194頁。